

ビルマ・ピャーポン県におけるビルマ国軍と日本軍の戦い

武島 良成

The Battle of Pyapon District in Burma between Burma National Army and Japanese Imperial Military

Yoshinari TAKESHIMA

Accepted June 18, 2025

抄録：本稿は、ビルマ国軍の対日蜂起時の、ピャーポン県での戦い（1945年3～4月）の様相を検討するものである。国軍が支配するビルマ（ミャンマー）の正史では、全土で多くの日本兵を殺したことになる。だが、個々の戦闘を客観的に説明していないし、殺害の数は明らかに過大である。本稿では、ピャーポン県での戦いに絞り、ビルマ側と日本側の資料を照合させて両軍の戦闘を追究する。結果、同県でのビルマ国軍による日本兵の殺害は20人程度に過ぎなかったことがわかった。それでも、同県の日本軍は80～90人であり、負傷者も多く出たことから、手痛い打撃だったことは間違いない。

索引語：ビルマ国軍、対日蜂起、ピャーポン、アウンサン将軍、歩兵第143連隊

Abstract: This study examined the aspects of the battle in Pyapon District (March–April 1945) during the Burma National Army's uprising against Japan. According to the official history of Burma (Myanmar) under military rule, many Japanese soldiers were killed all over the country. However, it does not objectively account for individual battles, and the number of deaths is clearly exaggerated. Focusing on the battle in Pyapon District, this study compared documents from the Burmese and Japanese sides to investigate the battle between the two sides. The results revealed that only about 20 Japanese soldiers were killed by the Burmese military in the District. Nonetheless, the Burmese side certainly dealt a heavy blow to the Japanese side. Of the 80 to 90 Japanese troops in the district, many were injured.

Key Words: Burma National Army, anti-fascist revolution, Pyapon, Bogyoke Aung San, 143th regiment

1. はじめに

本稿は、ビルマ国軍の対日蜂起時（1945年3月～8月）の、ピャーボン県での戦いの様相を検討するものである。ビルマ国軍と日本軍（及びそれぞれの協力者たち）の戦いを扱った研究は、1968年（1976年2版）のタキン・ティンミャ『ペッサイトーフランイエー・タナジョウッ・フニン・タインセーダイン（反ファシスト革命本部と10の管区）¹⁾』（以下、『ペッサイトーフランイエー』と記す）が代表的なものである。同書は、国軍が支配するビルマ（ミャンマー）の正史であり、国軍が日本軍と戦うために設定した10管区の部隊と戦闘、殺した日本兵の数を記している。同書は、本稿で扱うピャーボン県を含む第2管区で553人、ビルマ全体では1万8000人の日本兵を殺したとしている。

これに対して、1950年代の英国の公刊戦史は、英印軍と日本軍の戦闘を描写しながらも、ビルマ国軍の存在を無視していた²⁾。1978年のブライアン・ペレットの戦史も同様である³⁾。その後の1984年のルイ・アレンの大著も、国軍の存在に触れながらも、その戦闘には言及しなかった⁴⁾。日本では、1969年の公刊戦史が、ビルマ国軍の蜂起に至る経緯を説明したが、戦闘・戦果の説明は少なかった⁵⁾。次いで1970年に、ビルマ語学者の大野徹が、『ペッサイトーフランイエー』の記事をもとに管区や部隊の陣容を紹介した。だが、依然、戦闘の説明はほとんどなかった⁶⁾。

その後1991年に、ビルマ史学者の根本敬が「ビルマ抗日闘争の史的考察」を発表した。これが今のところ、ビルマ人以外の研究としては最も詳しい論稿である⁷⁾。根本は、10の管区ごとに『ペッサイトーフランイエー』の記述の概要を紹介した。その上で、1万8000人という殺害数はとても信用できないとし、1437挺という鹵獲した銃器の数と、殺害数の報告の中で最も控えめな4774人という数字をもとに、日本兵の殺害数を1000人（1437から約400の捕虜を引いた数）から4774人とした。これは、本格的な研究の端緒を開くものとして今日でも高い価値を持つ論稿である。

とはいえ、山に逃げ込んだ後（概ね1945年5～8月）の日本軍人の死因は、多くが飢餓やマラリアによる衰弱だったはずであり、銃器の鹵獲は必ずしも戦闘で殺したことを意味しない。また、4774人という数字も、実数に近いという保証はない。それに根本も、『ペッサイトーフランイエー』と同様、日本側の史料を使っておらず、個々の戦闘を具体的に捉え直そうとはしていない。本稿で扱うピャーボン県について言うと、『ペッサイトーフランイエー』はパンガダッの戦いに触れておらず、日本軍のピャーボン防衛隊長が最後に自爆したという創作を交えているが、根本はそれらも批判していない。

顧みるに、戦争での殺害数は誇張されやすいものなので、互いの戦力や戦況を勘案して確定させていく必要がある。それに、ノモンハン事件の研究で改めて言及されているが、戦果は殺傷の多寡だけで図るものではない⁸⁾。拠点の奪取や、兵站線・通信網の遮断なども含めて検討すべきである。ビルマ国軍と日本軍の戦いについても、戦況を総合的・客観的に分析する作業が必要である。付言すると、連合国軍東南アジア最高司令官のマウントバッテン大將は、1945年5月後半に、ビルマ国軍の力量を認めて合法組織とした⁹⁾。その際にマウントバッテンが恐れたのは、国軍と戦争になることだった。その意味では、ビルマ国軍を存続させたのは8月までの殺害の総数というよりも、3～5月に示した軍事的力量だったことになる。

以上の視角からビルマ国軍と日本軍の戦いを研究しようとする、『ペッサイトーフランイエー』を相対化し得るビルマ側の資料の不足が隘路になる。例えば、ヤンゴン・バスエの「タータッ・ドー・サーミャー（毒の言葉）」は、ビルマ国軍が調整した資料（ミャンマー国防省歴史研究院戦争公文書館所蔵の資料番号 DR4470 のものか）に依拠しており¹⁰⁾、『ペッサイトーフランイエー』と同種のものだと言える。ルードゥー・ウー・フラの『ダディンサーミャー・ピョーピャーデ・スィットウイン・バマーピー（新聞が語る戦時下のビルマ国）・4』も、ビルマ人の対日戦での活躍を相対化する者を「何も知らない人」と呼ぶなど¹¹⁾、同様の史観に収まっている。

それでも筆者は、ピャーボン県での戦いに関するビルマ側の資料を、他に数点得ることができた。それは、①ピャーボンのパサパラ（後述）支部が 1945 年 6 月にまとめた「ピャーボン・フマッタン・アティンジョウツ（ピャーボンのメモ）¹²⁾」、② 1980 年代の『アーシャ・ルーゲー・アスィーアヨン（バマーナインガン）・タマイン・1942～1945（東亜青年連盟史・1942～1945）¹³⁾』（以下、『アーシャ・ルーゲー・タマイン』と記す、同連盟はパサパラを支えた青年組織）、③年代不明の『ピャーボン・ニョウネー・フマッタン（ピャーボン分管区史）¹⁴⁾』である。

一方、ピャーボン県での戦いに関する日本側の資料として、これまで使われてこなかった『歩兵第百四十三連隊史¹⁵⁾』がある。同書のピャーボン県での戦闘の情報は多くないが、いつどこで誰が死んだのかを克明に調査・記録している。上の①～③のビルマ側資料と整合する部分も少なからずあり、照合することで客観性を高められるはずである。

その際、ピャーボン県での戦いは雨季前の 1945 年 3～4 月のものであり、病死者が相対的に少なかったことが分析上のメリットとなる。それに、上に記したように、この時期の戦いは政治的に極めて重要であり、ビルマ国軍が実際に戦果をあげたのか、それとも「戦果」は宣伝に過ぎなかったのかが注目される。

これらの要素に導かれつつ、以下、日緬のピャーボン県での戦いについて分析する。まず 2 で、対日蜂起前のピャーボン県の日本軍とビルマ国軍を見る。次いで 3 で、対日蜂起と、最も激しかったカザウンの戦いを見る。さらに 4 で、日本軍の退却とその後のピャーボンを見る。その上で 5 で総括をする。その際、ビルマの地域研究への貢献も意識して、住民が日本側の戦闘員として動員された件にも可能な限り触れる。また、ピャーボンを含むデルタ地区の概念図を載せたので参照されたい（図 1）。

2. 対日蜂起前のピャーボン県

(1) ピャーボン県の日本軍

ビルマ戦の前半、日本軍は、ピャーボン県を含むエーヤーワディー・デルタにまとめた部隊を置かなかった。そして、日本軍はデルタを第 5 防衛管区として、ビルマ方面軍憲兵隊に防衛・行政指導を担当させた¹⁶⁾。その後、1943 年後半に、英印軍の海からの侵攻に備えて第 54 師団を配置した。同師団が前線に移ると、第 2 師団を派遣して穴を埋めた。同師団の司令部はヒンダダーに、歩兵第 16 連隊や野砲兵第 22 連隊はパティン付近に位置したが、ピャーボンには大部隊を駐留させなかった¹⁷⁾。

その後 1944 年 7 月頃に、第 2 師団はビルマ東北方に抽出された。同年 1 月に新設されてベン



図1 デルタ地区概念図

ガル湾岸からデルタを担当していた第28軍は、戦線の縮小を図り、最前線のマユール半島の第55師団をデルタに移駐させることにした。同師団の歩兵第143連隊第8中隊（中隊長：仲田嘉明大尉）は、1944年11月頃から、ヒンダター、パテインを経てピャーボンへの移動を終えた¹⁸⁾。

同中隊はマユール半島での戦闘で多くの死傷者を出していた。『歩兵第百四十三連隊史』は、1943年11月頃から1944年5月までの戦いで73人が戦死し、多数の負傷者も出たことを記している¹⁹⁾。第55歩兵団長だった桜井徳太郎少将の日記によると、1944年6月20日時点で第8中隊の戦力は84人（あるいは64人）にまで減っていたという²⁰⁾。しかも、この後のデルタへの移動の際に、第2小隊をベンガル湾に沿うグワに残し、自余の者も病気や栄養失調が重なって、戦死1、戦傷死5、戦病死56、入院26という被害を出した²¹⁾。健康な状態でピャーボンに辿り着いた者は僅かであり、野戦病院からの追及者でかろうじて隊の形を保ったことになる。

『歩兵第百四十三連隊史』によると、第8中隊は、この後12月2日に63人、12月15日に14人の補充を受けたという。しかし、1945年2月25日に、25人が第1中隊に転属となった²²⁾。そのために、3月時点での総員は、配属された第3機関銃中隊の1個分隊、朝倉軍医、松本曹長ら3人の憲兵を合わせても、80～90人程度だったことになる²³⁾。他に、第2航空情報連隊の対空監視員が若干名いたが、2～3月にラングーンに引き揚げていた²⁴⁾。

このように、ピャーボンを含めてデルタの日本軍は多くなく、兵力不足を補うために、占領の早期から住民に自警団をつくらせていた。ピャーボン県では、ピャーボン憲兵分隊の憲兵がその「指導」に当たった。もっとも、前記のようにピャーボン県の憲兵は最終段階では3人しかいなかった²⁵⁾。ヒンダター県、マウビン県、チャウンター村の例からしても、この程度の数しか配置できなかったと見られる。憲兵と駐留軍は、人手不足を補うためにビルマ人の警官を部下として使った²⁶⁾。後述するように、国軍との戦いでも、ビルマ人の警官が日本軍に協力し

ていたという話がある。

そして、警察や行政の協力によって、ピャーボンにも早い時期に自警団がつくられた。ピャーボン町の自警団は、当初はダー（刀）と棒を装備していた。自警団員はこれに飽き足らず、1943年3月1日に、ピャーボン県庁に銃の所持を申し出た²⁷⁾。同年4月27日にはピャーボン県の自警団規則が制定されるなど、組織の整備が進んだ²⁸⁾。さらに1944年1月31日に、県庁は住民に、町や村を守る自衛隊（ジェータイン、jet'ain）をつくり、訓練をするよう指示をした²⁹⁾。エーヤーワディー・デルタに隣接するタヤワディー地区の史料からすると、自衛隊は一般の自警団から「有力者及軍役ニ使用シ得ル青壮年者」を選んだ「精鋭」だったことになる³⁰⁾。県庁は6月3日にも、自衛隊を町から村に広げるよう重ねて指示をした³¹⁾。9月1日の指示からして、銃も配られていたことがわかる³²⁾。

県庁は11月2日に、デーダイエー分管区の村に対し、敵船を目撃したという通報が遅れたのを遺憾とし、今後、遅延すれば日本軍が強く処罰すると通告した³³⁾。日本軍は、1943年6月と1945年1月にマウビン県の「強盗団」「通敵者」を攻撃し、1944年4月にはパティン県の「匪賊」を大量処刑するなどして、威力を誇示していた³⁴⁾。一般住民からすれば、日本軍は畏怖の対象になっていたはずであり、その圧力を無視するのは難しかっただろう。

第143連隊第8中隊の岸田弘少尉は、ピャーボン（あるいはボウガレー）の村々をまわって食糧を集めていたが、住民の変化を感じたのは1945年3・4月頃からだったとしている。急に軍票での支払いが嫌われるようになったということである³⁵⁾。それまでは大部分の住民は日本軍を恐れ、公然とは逆らわなかったことになる。

(2) ピャーボン県のビルマ国軍

次に、ビルマ国軍側の話に移る。バモオ政府の国防相で、ビルマ国軍の事実上のリーダーだったアウンサンは、戦況が悪化する中で対日蜂起を志向し、タキン・タントウン、タキン・ソウらの коммуニストと協議して1944年8月にパサパラ（反ファシスト人民自由連盟の略称、当初はパタパ）をつくった。最終的に1945年3月初頭にラングーンで幹部会議を行い、管区を分けると共に蜂起の日を定めた³⁶⁾。

その中で、第2管区（ハンターワディー県、ピャーボン県、マウビン県）は、国軍司令官のネーウィン大佐とアウンジー少佐の持ち場になった。政治顧問は、ピャーボン地区に潜伏していたタキン・ソウである。同管区には、第1大隊（長：ティンペー少佐）の第80中隊、第83中隊、第86中隊が割り振られた³⁷⁾。『ベッスィットーフランイエー』は、第2管区司令部が住民をグリラとして動員するために下した命令を載せている³⁸⁾。ただ、ネーウィンは蜂起の日を1945年4月2日と考えていたため、3月26日までラングーンに滞在していたという。それが、英印軍の南下が早かったために蜂起は前倒しとなった。そして3月25日夜頃から、各地のビルマ国軍は、日本軍の目を逃れるために逃亡した。

ネーウィンは26日に急遽モーターボートでピャーボン県に向かい、27日にデーダイエー町とチャイラツ町の間点のポウトウツ村付近で、管区内の隊の割り振りを決めたという。ピャーボン県は4つの分管区から成り立っていたが、バセイン大尉（第80中隊での席次4位³⁹⁾）がピャーボン分管区を、チーウィン大尉（第83中隊長）がボウガレー分管区を、トゥンリン中尉（第86中隊5位）がチャイラツ分管区を担当することになった。もう一つのデーダイエー分

管区にはまとまった軍を向かわせなかったことになる。また、第 86 中隊（ティンペー少佐直率）の主力は、第 3 管区に属すミャウンミャ町の東方などにおり、ピャーポン県の戦いにはあまり関わらなかったことになる。ピャーポン中心部での戦いの主役は、中隊長のアウンジーに代わりバセイン大尉が指揮をとる第 80 中隊だった。

ピャーポン分管区内での第 80 中隊の駐屯場所について、『ペッスィットーフランイエー』は言及していない。だが、『ピャーポン・ニョウネー・フマッタン』は、タレイッジー村（ピャーポン町の北 6 キロ）などに駐屯して準備をしていたと記している。同書は、地元出身でミンガラドゥンの士官学校の卒業生でもあるトゥンニョウ中尉（第 80 中隊 6 位）が、退役軍人のオルグや訓練に尽力したとも記している⁴⁰⁾。

3. 対日蜂起とカザウンの戦い

(1) 対日蜂起の始まり

バセイン大尉が率いるタレイッジー周辺の国軍は、他の管区と同様に、1945 年 3 月 25・26 日頃に行方をくらませたはずである。『ピャーポン・ニョウネー・フマッタン』は、同部隊が、その後カザウン（ピャーポン町の南西 14 キロ）に集結していったとしている⁴¹⁾。このことが、4 月 14 日のカザウンの戦いの伏線となった。

そうしておいてバセインは、一部の部隊をタレイッジーから北上させ、日本軍を奇襲した。『ピャーポン・ニョウネー・フマッタン』は、3 月 27 日夜にバセイン配下のハンテイン少尉（第 80 中隊 8 位）らが、タレイッジー村の川向こうのチャイラッ分管区にある日本軍の分哨を襲ったのが、第 2 管区での蜂起の始まりだとしている。この時に、日本の基地から機関銃や爆薬を手に入れたという⁴²⁾。

これに対して、「タータッ・ドー・サーミャー」は、最初の戦いが 3 月 29 日にチュンバルイン（チャイラッ町の南東 8 キロ）で行われたとし、日本兵 35 人と日本側のビルマ人 6 人を殺し、国軍の死者は 1 人、民間人の死者が 2 人だったとしている⁴³⁾。『ペッスィットーフランイエー』も、同日のチュンバルインでの戦闘を、第 2 管区での最初の戦いとし、日本兵 27 人を殺して国軍の被害はなかったとまとめている。この後、31 日にも同地で 8 人を殺し、国軍の死者は 3 人だったとしている⁴⁴⁾。

『歩兵第四百四十三連隊史』には、これらに対応する記事はない。だが、『藍住町史』が、3 月 27 日に「ピャポン県ダカンギャンホーガケ」で直江一秀が戦死したと記している⁴⁵⁾。「ダカンギャンホーガケ」の比定は難しいが、消去法で考えて、チュンバルインの西側の Danongyaung（ダナンジャウン）のことと類推できる⁴⁶⁾。同地はタレイッジーの川向こうであることから、『ピャーポン・ミョウネー・フマッタン』と話が符合する。また、船でボウガレー、チャイラッを経由して、3 月 29 日明け方にラングーンに着いた山中滋也（元日綿実業の社員で軍属）は、ボウガレー滞在時に、付近で蜂起が始まった旨聞いたという⁴⁷⁾。そうであれば、国軍が 29 日に蜂起したとは考えられない。正確な場所については議論が必要だが、戦闘の開始は 27 日だったと見るべきである。

『ペッスィットーフランイエー』は、この後 3 月 31 日のスィビューゴウンの戦いで日本兵 17 人、

スパイ 2 人、憲兵 2 人を殺し、国軍の死者は一人だったとしている⁴⁸⁾。だが、これに対応する情報は他に得られない。

(2) チャウツィエーズーの戦い

この後の 4 月初旬の様相だが、「ピャーボン・フマッタン・アティンジョウツ」は、ピャーボンの日本軍が、国軍を切り崩すために様々な手を打ったとしている。4 月 5 日には、タキンたち（ここでは、国軍派の志士の意味）を捕まえて牢屋に入れ、ピャーボンの女子校に町の幹部たちを招いて、（日本に背くなら）町を燃やすと脅したという。11 日には、町の広場に国軍の軍人の親たちを集めて、息子たちに離脱を促すよう説得をし、僧侶の会も開催したという⁴⁹⁾。日本軍は 1942 年 4 月に、ピャーボンの僧たちを使って銃器を回収し⁵⁰⁾、1944 年 9 月にはマハー・バマー組織（国民全てを組み込んだ組織）がピャーボン町での大会に僧侶を派遣し、住民の反英意識を煽ったことがあった⁵¹⁾。日本軍は、引き続き僧を使って人々を繋ぎとめようとしたことになる。また、同じ時期（1945 年 4 月 3・5・6 日）に、デーダイエーの北東のトゥンター分管区（ハントワディー県）で、民衆大会や民防衛指導が行われたことが確認できる⁵²⁾。日本はこのような民衆工作を継続したのだった。

また、「タータツ・ドー・サーミャー」や『ペッスィットーフランイエー』は、4 月初旬にも様々な場所で戦闘があったとしている。例えば、ティアーリ（4 月 3 日）、テェーゴン、ニーナウン（4 月 5 日）、ユアガレー、チュンニョウ、チャウンズ、チョウンター（4 月 9 日）などである。両書は、これらの戦闘で、合計 39 人の日本兵を殺したとしている⁵³⁾。だが、日本軍がそれだけの被害を受けたのなら、この後カザウンで攻勢に出られるわけがない。それに、『ピャーボン・ミョウネー・フマッタン』『ピャーボン・フマッタン・アティンジョウツアイエードー』『アーシャ・ルーゲー・タマイン』、それに日本側の資料に対応する情報がないので、戦闘の存在自体も疑われる。

それでも、4 月 5 日のチャウツィエーズー（タレイッジーの北西 5 キロ、ピャーボン町からは北に 11 キロ）の戦いについては、実際にあった可能性が高い。これは、「タータツ・ドー・サーミャー」と「ペッスィットーフランイエー」が、日本兵一人を殺したとする戦いである⁵⁴⁾。ビルマ側の被害については、前者はなかったとし、後者は記していない。

この戦いについて、『ピャーボン・ミョウネー・フマッタン』は、日付けを明記していないが、チャウツィエーズー村に日本の後方部隊が粃を買いに来たのを、トゥンニョウ中尉（第 80 中隊 6 位）とチョーニェインらが待ち伏せたものとしている。国軍は勝利を収め、日本軍の馬や武器を押収したという。さらに、トゥンニョウらは死体を収容に来た日本軍と戦ったが、テッチーが戦死したとしている⁵⁵⁾。同地での小戦闘は、実際にあったのかもしれない。

この後だが、「タータツ・ドー・サーミャー」は、4 月 11 日のボウガレー分管区のメザリー（ボウガレー町のすぐ東のボウガレー川沿い）の戦いで、日本兵一人を殺し、ビルマ側の被害はなかったとしている⁵⁶⁾。ボウガレー分管区については、『アーシャ・ルーゲー・タマイン』が、東亜青年連盟のメンバーが、ボウガレー分管区一特に町の東側で蜂起の準備を進めていたと記している。だが、日本軍が早期に撤退したのだという⁵⁷⁾。そうであれば、11 日に日本軍が町を引き払い、水路沿いで国軍と小衝突があったのかもしれない。

(3) カザウンの戦い

『ペッサイトーフランイエー』は、4月になると、デーダイエー分管区の東北に戻ったネーウィンの下に、第2管区の幹部たちが集まってきたように描写している⁵⁸⁾。半面、同書はピャーボン分管区のカザウン(ピャーボン町の南西14キロ)に部隊が集結したことを記していない。だが、次に述べるように最も激しい戦いがあったのはカザウンであり、同地に国軍の主力が集まったのは間違いない。

ピャーボン町の日本軍は、カザウンの国軍を4月14日に攻撃した。『ピャーボン・ミョウネー・フマッタン』はこの戦いを詳述している。まず、早朝にタマン村(ピャーボンの西2キロ)から150人の日本軍が迫ってきた。その中には憲兵隊やビルマ人の自衛隊員も混じっていた。テッスの隊が高台から機関銃を撃って日本軍を止めた。日本軍は、5人を繰り出して機関銃を壊そうとしたが、バセイン隊が村の入り口で食い止めた。ガザウンの村民も蜂起に協力して戦った。昼に連合国軍の飛行機2機が日本軍を攻撃した。日本軍は村に入り銃剣で戦おうとしたが、アウンセイン少尉(第80中隊11位)の隊が救援に来たので日本軍は退却した。

その間、トゥンニョウ中尉(第80中隊6位)はチャイッガバー(ガザウンの南東7キロ)で村民を集めて演説をしていた。銃声が聞こえてきたので、日本軍を背後から攻撃した。この戦闘で日本兵一人とビルマ人の自衛隊員一人を殺し、機関銃1と小銃1を押収した。戦いは長時間にわたり、エーヤーワディー地区(第2・第3管区)で最も厳しい戦いだった⁵⁹⁾。

『歩兵第百四十三連隊史』はこの戦いについて直接には記していない。それでも、4月14日に、田内章、藤本道男、松下喜市が「ピャボン西方」で、岡倉栄三郎、友井信輝、仁木好雄、吉田兵市が「ピャボン」で戦死したと記している⁶⁰⁾。いずれもカザウン戦に伴う死亡だったはずであり、7人以上の日本兵が死んだのだから、激しい戦いがあったことは間違いない。

この他のビルマ側の資料では、「ピャーボン・フマッタン・アティンジョウッ」が、4月14日にガザウン村で朝から夜まで戦闘があったとしている。そして、日本軍は54人が戦死して退却したとしている⁶¹⁾。「タータッ・ドー・サーミャー」も、同日の戦闘で54人の日本兵を殺し、ビルマ側の被害はなかったとしている⁶²⁾。

また、『ペッサイトーフランイエー』は、カザウンの戦いを15・16日の出来事としている。15日の戦闘は12時間におよび、日本兵20人以上を殺し、30人のビルマ人の自衛隊員を傷つけ、国軍は2人が死んだというのである。翌16日には日本兵6人を殺し、大砲1と機関銃2を押収したという⁶³⁾。記述を見比べると、『ペッサイトーフランイエー』は、「ピャーボン・フマッタン・アティンジョウッ」「タータッ・ドー・サーミャー」が記す日付けを改悪したと言わざるを得ない。半面、「戦果」については抑制的になり、国軍にも死者がいたことを認めている。日本軍に従ったビルマ人の自衛隊員の被害の大きさを記したことも注目される。

この他に、『アーシャ・ルーゲー・タマイン』も、カザウンの戦いを15・16日とし、日本兵54人を殺したとしている⁶⁴⁾。同書は『ペッサイトーフランイエー』の記述を部分的に受け継いだことになるが、警官や東亜青年連盟のメンバーも、日本軍の圧力の下で村民と戦ったという独自情報を記している。これは、『ピャーボン・ミョウネー・フマッタン』『ペッサイトーフランイエー』が記す、日本側に立って戦ったビルマ住民の存在を補強する材料になる。

なお、『アーシャ・ルーゲー・タマイン』は、この戦闘でバセインの隊はカザウンの陣を捨てたとしている。実際、次に述べるように、主戦場はよりピャーボン町に近いパンガダッ(デー

ダイエー分管区、ピャーボン町の東9キロ)に移った。

4. ピャーボンからの撤退とその後

(1) ピャーボンからの撤退

「ピャーボン・フマッタン・アティンジョウツ」は、ガザウン戦の直後の1945年4月16日朝に、連合国軍の7機がピャーボン町を爆撃し、家が燃えてビルマ人50人が死んだとしている。午後には10戸が燃え、消防隊や住民が火を消したという⁶⁵⁾。

『歩兵第百四十三連隊史』は、翌17日に佐野茂雄が、「ピャボン、チャイラ」で、原田時義、矢川牧雄が「ピャボン東南」で、竹内芳次が「ピャボン」で戦死したと記している⁶⁶⁾。これに対して、「タータツ・ドー・サーミャー」は、4月15・17日にパンガダッで戦闘があり、日本兵21人を殺し、ビルマ側の被害はなかったとしている⁶⁷⁾。『ペッスイットーフランイェー』は、16日にパンガダッで5時間ぐらい戦い、日本兵3人とビルマ人の自衛隊員8人を殺したと記し、別の部分で、17日に日本兵24人とスパイのビルマ人一人を殺したと書いている⁶⁸⁾。場所と日付けがほぼ一致するので、17日(頃)にパンガダッで戦闘があったのは確かだと言える。『ピャーボン・ミョーネ・フマッタン』は同地での戦闘を記していないが、パンガダッがピャーボン分管区外だったからだろう。

『歩兵第百四十三連隊史』の記事からすると、パンガダッの戦いを終えた時点で第8中隊の死者は少なくとも累計11人に達していたことになる。それに、同書は負傷者も多かったと記している⁶⁹⁾。同隊は元々80～90人程度だったのだから、手痛いダメージを受けたことになる。連合国軍東南アジア最高司令官のマウントバッテン大將は、4月21日時点で、ピャーボンでは既に「BDA」(ビルマ国軍の1943年までの略称)と日本軍の戦闘があり、連合国軍の情報部隊は500人の支援を得られると述べている⁷⁰⁾。連合国軍も、ビルマ国軍が優勢だと理解していたことになりそうである。

この後、4月24日に、第2中隊の玉井勇が「ペグー山脈ピャボン」で、機関銃分隊の山田房市が「ピャボン西方」で戦死したという⁷¹⁾。27日には、真木高雄が「ピャボン」で戦死したとされている⁷²⁾。その間、歩兵第144連隊の第1中隊の集成小隊が、パゴダポイント(デルタの南西端)からタウンゲー(ラングーンの北220キロ)に向かうために、チャイラッを通り抜けようとした。同隊は25日に攻撃を受け、隊長の芝満夫(軍曹)以下、宮下久寿男、藪本盛良、寺岡福芳らが戦死した⁷³⁾。これらの戦闘に対応する記事は、「タータツ・ドー・サーミャー」にはない。だが、『ペッスイットーフランイェー』は、日付けを明記していないものの、(国軍がピャーボン町に迫る中で)10回の戦いがあり、3人の日本兵を殺し、別の場所で5人を殺したと記している⁷⁴⁾。3人の日本兵というのが、玉井・山田・真木のことで、別の場所の5人というのが、芝・宮下・藪本・寺岡らを指すのかもしれない。

結局、ピャーボンの第8中隊は、4月29日(の未明)に撤収した。この少し前に、バギー方面の英印軍が急速に南下したために、ビルマ方面軍司令部は23日にラングーンを脱出していた。そのため、デルタとラングーンの防衛を担当する第28軍は、24日早朝に隷下の各隊にバギー山脈(ラングーン北方の山脈)に撤収するよう下命した。この命令を受けて、振武兵团(長:

第55歩兵団長の長沼貫一大佐)は、4月26日に、歩兵第143連隊を含む各隊にバゴー山脈に集結するよう指示したのだった⁷⁵⁾。

先に、カザウン戦までに日本軍が少なくとも11人の死者を出したことを記したが、その後も3人(あるいはそれ以上)が戦死していた。他に多数の負傷者がいたのだから、元々80～90人程度に過ぎなかった日本軍は、顕著に弱体化したことになる。ピャーポンの維持は困難になっており、撤退命令は守備隊にとって救いの綱になったはずである。

『歩兵第百四十三連隊史』は、ピャーポンの部隊が、29日に数隻の民船でエーヤーワディー河(の支流)を遡ったと記している。そして、国軍の攻撃を排除しつつ、(東北方の)タイッチーに向かったのだという⁷⁶⁾。

第8中隊の撤収について、「ピャーポン・フマッタン・アティンジョウツ」は、28日の夜12時のこととし、船23隻でピャーポンを離れたとしている。途中、国軍がタモワ(ピャーポン～チャイラッ間の水路の途中)で攻撃を仕掛け、3隻を沈めたとする。また、29日の昼2時頃に、国軍がピャーポン町で戦ったとしている⁷⁷⁾。撤退を妨害しようとしたという記述は、日本側の資料とも符合する。

また、チャイラッ町に対して、1945年5月11日付けでチョーザン中尉(第83中隊4位)が下した「国民独立軍の命令」という文書が残っている⁷⁸⁾。同文書は、チャイラッ分管区の占領を4月29日夜としている。ビルマ側はピャーポンやチャイラッの掌握を4月29日と考えたことになり、『歩兵第百四十三連隊史』『ピャーポン・フマッタン・アティンジョウツ』が記す撤退の日程と符合する。

他方、「タータツ・ドー・サーミャー」は、最後の戦闘が23日のポウトウツ(チャイラッ～トゥンテーの水路)の戦いだったとし、20人の日本兵を殺し、ビルマ側の損害はなかったとしている⁷⁹⁾。だが、これに対応するような情報は他に見当たらない。それから、『ペッサイトーフランイエー』は、日本軍のピャーポン町守備隊長の少佐が、最後は手榴弾で自殺したと書いている⁸⁰⁾。だが、ピャーポン県に少佐はおらず、守備隊長で中隊長の仲田大尉も健在であり、この記述も受け入れられない。

ピャーポンを退いた第8中隊は、5月6日にタイッチー(ラングーン北方60キロ、インsein県)の南西に到着した。英印軍は既にラングーンを占領しており、第28軍の退路を断つために、ピィ街道を南北から進みつつあった。このため第8中隊は、コウッコウワ川を遡って上陸しようとしたはずである。ところが、上陸前に第1管区のビルマ国軍(第102中隊のうちバテイン大尉が率いる部隊)の奇襲を受けた。そして、富本正一、杖谷政美が戦死し、多数の負傷者を出した。襲撃が終わった後、第8中隊は上陸し、ピィ街道を横断してバゴー山脈に向かった⁸¹⁾。

(2) その後のピャーポン

「ピャーポン・フマッタン・アティンジョウツ」は、5月3日午前、国軍500人が、コミュニストや英国の情報部員4人とともにピャーポン町に入ったとしている。そして4日に、ビルマのコミュニストの有力リーダーのタキン・ソウが、(周辺の)村で大勢を前に演説し、ピャーポン県共産党をつくったとしている。さらに17日に、共産党は会議をして、住民に映画「ゲリラ隊」を無料で見せたという⁸²⁾。

またチャイラッについては、前記の5月11日付け「国民独立軍の命令」により、独立軍(国軍)

は9人の名士たちと同分管区を統治することになった。この時に国軍は、村々の村長についても選出し直すよう指示をした⁸³⁾。

この間、ミャウンミャ町（ピャーボン西方90キロ）に取り残された海軍第13警備隊（長：深見盛雄大佐）の主力は、5月8日・12日に舟艇で同地を離れた。だが、途中でビルマ国軍に襲撃された上、タイッチーの西で英印軍の砲火を浴びた⁸⁴⁾。この後、同隊のうち「陸上転進隊」は、フライン付近で舟艇を降りピィ街道を横断してバゴー山脈に向かった。残る160人の「海上転進隊」は、水路を引き返して南下したが、攻撃を受けてバラバラになり、大部分は生還できなかった。その中で、堤主計少佐の舟艇は、19日にエーヤーワディー河の河口に達し、マルタバン湾を横断して退却した⁸⁵⁾。『伊予市誌』は、5月20日に「ピャーボン市」で吉田貞美海軍上等兵曹が戦死したと記しているが⁸⁶⁾、落後した海軍の関係者だったのだろう。

こうして日本軍はピャーボン県を去った。「ピャーボン・フマッタン・アティンジョウツ」は、5月22日にピャーボン町にパサパラ支部をつくり、28日には日本の軍票の使用を停止する通知を散布したと記している⁸⁷⁾。パサパラの次の主要課題は、英国といかに交渉し、独立を獲得するかということだった。

5. まとめと展望

ここまでの話は、次のようにまとめられる。ピャーボン県には1945年3月時点で、日本陸軍の第143連隊第8中隊が駐留していた。同中隊は第2小隊が欠けていたし、戦闘と病気で著しく消耗し、人員は80～90人程度だったはずである。日本軍は、兵力不足を補うために、ビルマ住民に自衛隊（ジェータイン）をつくらせており、実際に彼らは日本軍と共に戦闘に参加した。

ビルマ国軍の方は、第1大隊の第80中隊をバセイン中尉（中隊での席次4位）が率いてピャーボン分管区を、第83中隊をチーウィン大尉（中隊長）が率いてボウガレー分管区を、第86中隊の一部をトゥンリン中尉（5位）が率いてチャイラッ分管区を担当した。ただ、ボウガレーの日本軍は早期に撤収したので激しい戦いにはならず、県内での戦いは主にバセインの中隊が担うことになった。

蜂起は3月27日夜に始まった。元々タレイッジーなどに駐留していたバセイン隊は、ピャーボン町の南西のカザウンに移動しつつあったが、一部の隊が川向こうの日本軍の基地を襲撃したのだった。その後、4月初めにも、タレイッジーの北西方面で小戦闘があった。その後、ボウガレーの部隊が合流したことで余裕ができた日本軍は、4月14日にカザウンのバセイン隊を攻撃した。この戦いは激戦となり、7人以上の日本兵が死んだ。4月17日にはパンガダッでも激戦があり、4人以上の日本兵が死んだ。その後も、ピャーボン町周辺で衝突があり、第8中隊は累計14人以上の兵士を失った。25日には、第144連隊第1中隊の集成小隊がチャイラッを通り抜けようとし、ビルマ国軍の攻撃で4人が戦死した。まもなく、第28軍の命令にもとづいて第8中隊は撤退することになり、29日未明に船に分乗してピャーボンを引き払った。そして、インsein県のタイッチー付近で上陸しようとしたが、5月6日に別の管区の国軍に襲撃され、2人が戦死し多数が負傷した。

以上が、確認できた戦闘・戦況の概要である。一連の戦闘でのビルマ国軍の戦死者は、「ター

「タータツ・ドー・サーミャー」は、ピャーボン県全体で3人と市民3人⁸⁸⁾、『ペッスィットーフランイエー』は第2管区全体で戦死18、負傷5と記している⁸⁹⁾。後者は、日本軍の被害とほぼ同数なのでリアリティがあるが、ハンターワディー県での損害を差し引くと、もう少し少なかった可能性がある。

いずれにせよ、「タータツ・ドー・サーミャー」が記すピャーボン県で186人⁹⁰⁾、『ペッスィットーフランイエー』が記す第2管区で553人というような殺害の数字は過大である。特に後者は、戦闘の日時も深く検討しておらず、むしろ誤りが増えている。一方で、公的な歴史書とは別系統の『ピャーボン・ニョウネー・フマッタン』の記述は、日本軍の資料と整合する点が多く、比較的信頼できる編纂物だと言える。『アーシャ・ルーゲー・タマイン』の記述も抑制的であり信頼に値する。これらの編纂物があることは記憶されてよいだろう。

それから、殺害数の過大な主張はともかくとして、国軍が確かに実績をあげていたことも確認できた。国軍はカザウンで日本軍を食い止め、すぐにパンガタツで攻勢に出た。そして、1か月の戦闘で、少なくとも18人（うち4人は第144連隊）の日本兵を殺害し、多数を負傷させた。ピャーボンの第8中隊は元々80～90人程度だったので、被った打撃は大きかったことになる。第8中隊が4月29日に撤収したのは、第28軍の判断によるものだったが、同町を守り通すのが難しくなっていたのも事実だった。客観的に見て、ピャーボンの戦闘で、ビルマ国軍は日本軍をかなり苦しめたと言える。それに、英印軍に先立ってピャーボン町やチャイラッ町に「解放軍」として入ったのもビルマ国軍だった。これらの対日戦の「成果」は、ビルマ国軍を合法として解体しなかったマウントバッテンの5月の判断に影響したはずである。その後8月19日には、アウンサンが、独立と国民のために奮闘した実績のある国軍という自画像を提示したが⁹¹⁾、その図も満更嘘ではなかったことになる。

以上の分析は、ピャーボン県に限定したものに過ぎない。それでも、これまで日本とビルマの資料を照合する作業は行われず、戦闘と言える程のものが本当にあったのかも不明瞭だったので、激しい戦闘の存在を確認できたのは有意義であるはずである。それに本稿は、政治的に重要な1945年3～4月の戦況・戦闘の分析である。この時期については、他にもハンターワディー県（カヤン、トゥンテーなど）に関する詳しい資料がある⁹²⁾。3月のマンダレー周辺でのバトゥー隊の戦闘についても、裏づけとなる日本側の資料を見つけている⁹³⁾。引き続き詳細に分析することで、ビルマ国軍と日本軍、さらには英国との関係について、理解を深められるだろう。

注

- 1) タキン・ティンミャ『ペッスィットーフランイエー・タナジョウツ・フニン・タインセーダイン（反ファシスト革命本部と10の管区）』マハー・ナンダー・サーペー、Rangoon、1976年（初版1968年）。
- 2) John Ehrman, *Grand Strategy Vol. 6: October 1944 – May 1945*, Her Majesty's Stationery Office, London, 1956. 同時期に刊行された Hilary Saint George Saunders, *Royal Air Force 1939 – 1945, Vol. 3: The Fight is Won* (Her Majesty's Stationery Office, London, 1954, pp. 360-361) も、ラングーン再占領に触れながら、その際のビルマ国軍の活動を捨象

している。

- 3) Byran Perrett, *Tank Tracks to Rangoon*, Robert Hale, London, 1978. 第12章でラングーン占領の時期を扱っているが、ビルマ国軍には全く触れていない。
- 4) Louis Allen, *Burma: The Longest War, 1941-45*, Joseph Malaby Dent and Sons Limited, London, 1984. pp.579-589, 663-677 (邦訳版、ルイ・アレン著、平久保正男・永沢道雄・小城正訳『ビルマ 遠い戦場・下・ビルマで戦った日本と英国 1941～45年』原書房、1995年、216～229、付録35～61頁)。第11章でアウンサンの動きに触れているが、ビルマ国軍の戦闘には触れていない。巻末の参考文献のリストにも、ビルマ国軍の戦闘に関わるようなものはない。
- 5) 防衛庁防衛研修所戦史室『シッタン・明号作戦：ビルマ戦線の崩壊と泰・仏印の防衛』朝雲新聞社、95～111頁。
- 6) 大野徹「ビルマ国軍史・2」『東南アジア研究』8巻3号、1970年、363～368頁など。
- 7) 根本敬「ビルマ抗日闘争の史的考察」伊東利勝・栗原浩英・中野聡・根本敬『東南アジアのナショナリズムにおける都市と農村』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1991年。一覧表は193頁、死傷者についての総括は195頁。
- 8) 稲葉千晴司会、花田智之・齋藤達志・笠原孝太・戸部良一「(パネルディスカッション) ノモンハン事件80周年」『軍事史学』55巻3号、2019年、17、23、29頁。花田智之「ソ連から見たノモンハン事件：戦争指導の観点から」麻田雅文編『ソ連と東アジアの国際政治：1919～1941』みすず書房、2017年、307頁。この点については、硫黄島の戦いで、米軍の方が日本軍よりも死傷者が多かったことも想起すべきである(防衛庁防衛研修所戦史室『中部太平洋陸軍作戦・2・ペリリュー・アンガウル・硫黄島』朝雲新聞社、1968年、415頁)。
- 9) Hugh Tinker, *Burma: The Struggle for Independence 1944-1948: Vol. 1: From Military Occupation to Civil Government*, Her Majesty's Stationery Office, London, 1983, pp. 260-261, 151番(1巻)、『Supreme Allied Commander, South East Asia to Chiefs of Staff』, pp. 300-307, 185番(1巻)、『Rear Headquarters, Supreme Allied Commander, South East Asia』。この間の事情は、ルードゥー・ウー・フラ『ダディンサーミャー・ピョーピャーデ・スイットウィン・バマーピー(新聞が語る戦時下のビルマ国)・4』ルードゥー・サーオウッタイツ、Mandalay、1968年、pp. 260-262)を参照。
- 10) ヤンゴン・バスエ「タータッ・ドー・サーミャー(毒の言葉)」『ミャワディ・マガジン』1955年3月号。282頁に原文書の写真を載せている。
- 11) 『ダディンサーミャー・ピョーピャーデ・スイットウィン・バマーピー・4』, p. 122, 125。同書は、アウンサンが述べた2万人以上という殺害数を提示している。
- 12) 「ピャーボン・フマッタン・アティンジョウツ(ピャーボンのメモ)」『アイェードーポウン・サーザウン』1号、1945年7月5日、14～16頁。この雑誌はパサパラ(パタパ)のピャーボン町支部が発行したもの。
- 13) アーシャ・ルーゲー・タマイン・ピュズイエーアプエ『アーシャ・ルーゲー・アスィーアヨン(バマーナインガン)・タマイン・1942～1945(東亜青年連盟史・1942～1945)』。同書は1980年代初期に元メンバーたちが編集した未公開の草稿。同史料については、拙著『日本占領とビルマの民族運動—タキン勢力の政治的上昇』(龍溪書舎、2003年、36、59～60頁)

を参照。東亜青年連盟については、同書の第一部を参照。

- 14) 『ピャーポン・ニョウネー・フマッタン (ピャーポン分管区史)』。全 12 頁。英国への抵抗運動から説き起こし、対日戦の終了までを扱っている。
- 15) 歩兵第百四十三連隊史編纂委員会『歩兵第百四十三連隊史』歩兵第百四十三連隊戦友会、1982 年。
- 16) 土屋保一「ビルマ・ヘンザダ県における秘密戦」加藤正編『岐阜県従軍回顧録：支那事変・大東亜戦斗編・2』従軍回顧録編纂委員会、1970 年、109～110 頁。土屋保一『軍隊の追憶を辿る』私家版、1986 年、178 頁。
- 17) これらの軍の移動については、防衛庁防衛研修所戦史室編『インパール作戦』（朝雲新聞社、1968 年、260～264 頁）を参照。ただし、同書の記載はあまり詳しくない。一方で、ビルマ（ミャンマー）国立公文書局、史料番号 1/15(D) 3876、「(仮タイトル) ピャーポン県健康・防衛組織・1944 年」の 1944 年 4 月 6 日の「地区衛生防衛委員会」からは、ピャーポン駐留の日本軍の代表者が「二階堂」だったことが判明する。これは二階堂文六憲兵准尉のことかもしれない。二階堂文六については、『官報』1952 年 2 月 14 日号、4 頁を参照。
- 18) 『歩兵第百四十三連隊史』、462 頁。
- 19) 『歩兵第百四十三連隊史』、460～461 頁。
- 20) 「桜井徳太郎日誌 (1944.2.17～3.28)」 「同 (1944.3.29～6.11)」 「同 (1944.6.12～8.17)」 (防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵、史料番号は南西—ビルマ—167～169) によると、1944 年 3 月 20 日に 61 人、4 月 24 日に 68 人、5 月 12 日に 76 人、5 月 20 日に 71 人、6 月 20 日の「戦力」が 84 人、同日の「戦力表」が 64 人ということである。
- 21) 『歩兵第百四十三連隊史』、462 頁。同時期にマユ半島で戦っていた第 1 大隊長 (第 1・2・3 中隊などが所属) の辻本正夫も、「(武島注：1944 年夏頃には) 大隊の将兵は殆んどマラリヤに冒されていたが」と記しており、衛生状態が深刻だったことがわかる (辻本正夫『ビルマ マユ山系：歩兵第百四十三大隊第一大隊の戦闘』私家版、1970 年頃、29 頁)。
- 22) 『歩兵第百四十三連隊史』、462 頁。
- 23) 機関銃分隊などの配属の件は、『歩兵第百四十三連隊史』の 407 頁による。同書には、ピャーポン移駐からシッタン河の渡河前までの戦死が 24 人、戦傷死が 1 人、戦病死が 6 人、現在員が 60 余名という記事もあり、総員を割り出す参考になる (462、516 頁)。
- 24) 松尾敏夫『ビルマ派遣第二航空情報連隊戦誌』徳島出版、1989 年、52～53、214 頁。
- 25) 『歩兵第百四十三連隊史』、407 頁。なお、中野校友会『陸軍中野学校』（中野校友会、1978 年、590 頁）の記事の中に、1944 年後半に久保田憲二郎少尉がピャーポンに派遣されたように読める箇所がある。だが、保田一郎「高千穂機関回想録」（独立歩兵第五四三大隊戦友会「たけのこ会」『死斗万里』、独立歩兵第五四三大隊戦友会「たけのこ会」、1990 年、83 頁）が記すデルタ工作の一覧では、久保田の 1945 年段階での拠点はパティエインになっている。『歩兵第百四十三連隊史』の記事からしても、久保田は国軍との戦闘時には、ピャーポンにいなかったことになる。
- 26) ヒンダダーの例は、「ビルマ・ヘンザダ県における秘密戦」(109～114 頁)、『軍隊の追憶を辿る』(178、181～182 頁) を、マウビンの例は、稲沢達「モービン県の民防衛指導」（香川県ビルマ会『パゴダに捧ぐビルマの夕映え』香川県ビルマ会、1972 年、354～355 頁）を、

チャウンターの例は、全国憲友会連合会本部『日本憲兵外史』（全国憲友会連合会編纂委員会、1983年、1071～1073頁）を参照。

- 27) ビルマ（ミャンマー）国立公文書局蔵、3847、「（仮タイトル）ピャーボン県自警組織・1942～1943年」の、1943年3月1日付け自警団から県庁への申し出による。
- 28) 1943年4月27日付けピャーボン県警察の「ビルマの独立のために」に収められている。個人的にコピーを入手したもの。
- 29) ビルマ（ミャンマー）国立公文書局蔵、3901、「（仮タイトル）ピャーボン県雑史料・1944年」、1944年1月31日付け県庁の指示による。
- 30) 「ビルマ「サラワデイ」地区管内情勢報告」の中の1943年10月付け「サ地区防衛強化実施計画」による。防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵、南西—ビルマ—318。
- 31) 「（仮タイトル）ピャーボン県雑史料・1944年」の1944年6月3日付け県庁から町長たちへの指示による。
- 32) 「（仮タイトル）ピャーボン県雑史料・1944年」の1944年9月1日付け県庁の指示による。
- 33) 「（仮タイトル）ピャーボン県雑史料・1944年」の1944年11月2日付け県庁からデーダイエー分管区の村への指示による。
- 34) 拙著『「大東亜共栄圏」の「独立」ビルマ』（ミネルヴァ書房、2020年、207、209頁）による。1945年1月のマウビンの件については、法務省から国立公文書館に移管された「平11法務4A17-2 4612 BC級（イギリス裁判関係）ビルマ裁判・全般資料」を参照。
- 35) NHKアーカイブス、岸田弘「証言記録 兵士たちの戦争・ビルマ濁流に散った敵中突破作戦・徳島県・歩兵第143連隊」（2008.9.26収録）による。https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0001100111_00000（最終閲覧2024年12月4日）。この時の聞き取りをもとに刊行された『証言記録 兵士たちの戦争・3』（NHK「戦争証言」プロジェクト、日本放送協会出版、2009年）は、岸田の談話を数か所で引用している（30、39～40頁）。だが、軍票の件がマユール半島での戦争後に配置され、主旨が適切に伝わらなくなっている。
- 36) ウー・バスエ『（仮タイトル）ウー・バスエ関係資料・その1』のウー・バスエの回想記（原稿）の31頁など。個人的にコピーを入手したもの。
- 37) 本稿では、ビルマ語のタッイン（ta?yin:）を、日本軍の当時の用法と部隊規模を考慮して中隊と訳した。現在では、通常は大隊と訳される。
- 38) 『ペッスィットーフランイエー』、213～220頁。
- 39) 以下、席次は『ペッスィットーフランイエー』の233～234頁の一覧にもとづいて記した。
- 40) 『ピャーボン・ミョウネー・フマッタン』、9～10頁。
- 41) 『ピャーボン・ミョウネー・フマッタン』、10頁。
- 42) 『ピャーボン・ミョウネー・フマッタン』、10頁。
- 43) 「タータッ・ドー・サーミャー」、283頁。
- 44) 『ペッスィットーフランイエー』、222、225頁。
- 45) 藍住町史編集委員会『藍住町史』藍住町、1965年、353頁。
- 46) ダナンジャウンの場所は、京都大学東南アジア地域研究研究所が所蔵する外邦図（例えば、Burma Survey Departmentの地図を改編した資料番号5-016・5）を参照。地名の比定は、*Burma Gazetteer: Pyapon, District, Vol. B No. 15: including Town and Village Census*

Tables (Office of the Superintendent, Government Printing, Rangoon, 1912, pp. 28-39) の
ピャーボン県の 384 の町村からの消去法による。

- 47) 飯森徳秀『ノアの戦い』三田書房 1968 年、256 ～ 257 頁。
- 48) 『ペッサイトーフランイエー』、225 頁。
- 49) 「ピャーボン・フマッタン・アティンジョウツ」、15 頁。
- 50) 「ピャーボン県治安維持会告知・2」による。個人的にコピーを入手したもの。
- 51) 『バマ・キッ』1944 年 9 月 28 日号。
- 52) 「戸倉清次日誌」(防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵、南西一ビルマー667) には、独立歩兵第 451 大隊の以下の宣撫活動が記されている。1945 年 4 月 3 日にトゥンテー地区のビルマ人会に副官を出席させた、5 日の民衆大会には 700 人が来た、6 日の民防衛指導に大尉を出席させた、など。
- 53) 「タータッ・ドー・サーミャー」、283 頁。『ペッサイトーフランイエー』、225 頁。
- 54) 「タータッ・ドー・サーミャー」、283 頁。『ペッサイトーフランイエー』、225 頁。
- 55) 『ピャーボン・ミョウネー・フマッタン』、11 頁。
- 56) 「タータッ・ドー・サーミャー」、283 頁。
- 57) 『アーシャ・ルーゲー・タマイン』、533 ～ 534 頁。
- 58) 『ペッサイトーフランイエー』、225 頁。
- 59) 『ピャーボン・ミョウネー・フマッタン』、11 ～ 12 頁。
- 60) 『歩兵第百四十三連隊史』、順に 717、742、746、693、727、731、760 頁。吉田の漢字の記載は、半田町誌出版委員会『半田町誌・上』(半田町誌出版員会事務局、1980 年、1144 頁) に従った。
- 61) 「ピャーボン・フマッタン・アティンジョウツ」、15 頁。
- 62) 「タータッ・ドー・サーミャー」、283 頁。
- 63) 『ペッサイトーフランイエー』、226 頁。
- 64) 『アーシャ・ルーゲー・タマイン』、534 頁。
- 65) 「ピャーボン・フマッタン・アティンジョウツ」、16 頁。
- 66) 『歩兵第百四十三連隊史』、711、737、754、721 頁。
- 67) 「タータッ・ドー・サーミャー」、283 頁。
- 68) 『ペッサイトーフランイエー』、226 頁。
- 69) 『歩兵第百四十三連隊史』、462 頁。
- 70) *Burma*, p. 225. 125 番 (1 巻) , ‘Supreme Allied Commander, South East Asia to Chiefs of Staff’.
- 71) 『歩兵第百四十三連隊史』、723、757 頁。日和佐町史編纂委員会『日和佐町史』日和佐町、1984 年、956 頁。
- 72) 『歩兵第百四十三連隊史』、723、744 頁。
- 73) 歩兵第百四十四連隊戦記編纂委員会『歩兵第百四十四連隊戦記』歩兵第百四十四連隊戦記編纂委員会、1986 年、708、684、70、667 頁。中島町誌編集委員会『中島町誌』中島町、1968 年、441 頁。第 1 中隊の移動については、『歩兵第百四十四連隊戦記』の 435 頁を、各人の階級については 438 ～ 439 頁を参照。

- 74) 『ペッスイットーフランイエー』、227 頁。
- 75) 以上の経緯は、『シッタン・明号作戦』、269 ～ 276 頁や、第 28 軍の作戦参謀だった福富繁（元少佐）の『地獄からの生還』（シッタン会、1988 年、36 ～ 39 頁）を参照。
- 76) 『歩兵第百四十三連隊史』、407 頁。
- 77) 「ピャーボン・フマッタン・アティンジョウツ」、16 頁。
- 78) 個人的にコピーを入手したもの。全 1 頁。
- 79) 「タータッ・ドー・サーミャー」、283 頁。
- 80) 『ペッスイットーフランイエー』、227 頁。
- 81) 『歩兵第百四十三連隊史』、727、724、462、407 頁。『ペッスイットーフランイエー』では 232 頁に、コウッコウワ河での襲撃の話がある。指揮を執ったバテイン大尉は、210 頁の表によると第 102 中隊の第 3 小隊長になる。
- 82) 「ピャーボン・フマッタン・アティンジョウツ」、16 頁。
- 83) 前掲、「国民独立軍の命令」。
- 84) 堤新三『鬼哭啾々：ビルマ派遣海軍深見部隊全滅の記』（毎日新聞社、1981 年、60 頁）は、部隊の最終的な引き上げが 5 月 8 日だったように書いているが、「第十二警備隊 第十三警備隊 連合陸戦隊戦闘詳報」（1946 年調整、Ref. C08030730400）や、寒永市太郎「ミヤンミヤ転進記」（セクバン会『セクバン：ビルマ日本語学校の記録』セクバン会、1970 年、583 ～ 584 頁）は、12 日だったとしている。また、堤はタイッチー付近でビルマ国軍に襲撃されたとしているが、戦闘詳報は、戦車に攻撃されたとしているので、英印軍だった可能性が高い。
- 85) 『鬼哭啾々』、85 ～ 90 頁など。部隊がバラバラになった件については、「ミヤンミヤ転進記」も参照（584 頁）。
- 86) 伊予市誌編纂委員会『伊予市誌』伊予市、1986 年、491 頁。
- 87) 「ピャーボン・フマッタン・アティンジョウツ」16 頁。
- 88) 「タータッ・ドー・サーミャー」、283 頁。
- 89) 『ペッスイットーフランイエー』、233 頁。553 人という殺害数もこのページに記されている。
- 90) 「タータッ・ドー・サーミャー」、282、283 頁。
- 91) 『ディードウツ・ジャーネー』19 巻 3 号、1945 年 8 月 27 日（『ダディンサーミャー・ピョーピャーデ・スイットウイン・バマーピー』、pp. 244-250）。
- 92) 例えば、小宮徳次『ビルマ戦：戦争と人間の記録：前篇』（現代史出版会、1978 年、72 ～ 78 頁、120 ～ 124 頁）は、1945 年 3 月末のハンターワディー県での死傷者について詳細に記している。同書は、4 月のニャウンドウンなどからの撤退時の被害にも触れている。この他に、鳥井武彦『南十字星に祈る：敢威兵団の終焉』（私家版、1986 年、106 ～ 108 頁）も、ハンターワディー県での被害に言及している。
- 93) 三瓶義章編『鉄道第五連隊史（原稿）』私家版、1980 年、656 頁。国会図書館憲政資料室蔵、片倉衷関係文書、1309 番の鉄道第 5 連隊慰霊団「ビルマ、マレー戦跡巡礼団慰霊報告」、10 ～ 11 頁。指揮官のバトゥー少佐については、拙稿「アウンサン将軍と「アーザーニー・ベイッマン」（殉難者廟）」（『史林』107 巻 4 号、2024 年、61 頁）を参照。

本研究は JSPS 科研費 JP24K04264 の助成を受けたものです。